

中国の専門家が SU-35 について語る

漢和防務評論 20141003 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

SU-35 の対中輸出に関する 11 月 14 日の漢和 20141102 の記事に関連し、漢和防務評論 20141003 の記事をお送りします。

この記事は、SU-35 の対中輸出に関して中露のかけひきに関する記事です。

中国側は、機関紙「解放軍報」紙上で、SU-35 は第 5 世代機に比べれば性能は程遠く、輸入は保留すべきとする意見を述べています。11 月 14 日の記事はすでに輸出が決定的であるとした記事でしたので、それ以前の状況を述べた記事で情報的には役立たないように見えますが、経緯を知ることによって、中国の姿勢が逐次変化していく状況が分かります。

本誌編集部

人民解放軍機関紙「解放軍報」は、2 月 8 日、空軍指揮学院の大佐級の専門家を取材し、外国メディアによる「もし中国が SU-35 を輸入したならば、10 年間は周辺国に対し優勢を維持できる」とする記事への論評記事を掲載した。「解放軍報」紙と空軍指揮学院学者の立場に注目する必要がある。もし本誌の判断が正しければ、この「解放軍報」の記事は、漢和防務評論の関連記事に関連して掲載されたものと思われる。KDR は、2 度、SU-35 は 10 年間周辺国戦闘機に対し技術的優勢を維持できる可能性があるとの文章を掲載した。1 回目は本誌独自の記事であり、SU-35 と周辺国家の戦闘機 SU-30MKI (注: インド)、SU-30MKV (ベトナム)、F-15J (日本)、F-16 (台湾) と比較し、SU-35 は、暫時東南アジアの空を制覇するであろうと結論付けた。(何年間、優勢を維持するとまでは述べていない)

別の記事は投稿記事である。台湾の楊政衛先生は、SU-35 は中国空軍に 10 年間の技術的優勢をもたらすものと認識している、と述べた。この記事は当然彼個人の意見である。本誌は誰でも投稿でき、公開される。西側世界のメディアは自由であり、言論が開放されていることは多言を要しない。この 2 つの記事は中国の新聞に転載された。

笑うべきは、中国の専門家による政治的な評価である。中国記者の問題点は：外国メディアがこのおかしなニュースを突然掲載した目的は何か？とした点にある。

件の大佐は：外国メディアがこのようなおかしなニュースを掲載したのは、耳

目を惑わすためではないか。この数年来、中国軍事力に関するニュースは、西側メディアによって歪曲されている。中国空軍の装備の水準に関して、彼らは過大に誇張し、或いは過大に低く評価している。客観、公正な評論は見られない。中国戦闘機の輸出に関しても、中国（生徒）がロシア（教師）の市場を奪う可能性がある、との論評がなされている。このような状況下で、西側メディアがあれこれ報道することは、あきらかに状況を混乱させる目的があるものと思われる。しかし中露両国の軍事協力は堅固であり、さらに協力を拡大し、相互の利益を図ることが今後の発展の大勢である、と述べた。

注意すべきは、中国の学者は”西側メディア”全体を批判していることである。自分達だけが正しく、公正である、と。中国学者の上述の見解に対して、本誌は評論していない。本誌の読者、特に本誌英文版の読者は、我々よりも問題の本質を理解している。さて、この中国学者の SU-35 に対する技術的評価を振り返って考えて見る。

機関紙「解放軍報」の問題記事とは、「最近ある外国の雑誌は、もし中国がロシアの SU-35 戦闘機を導入したならば、中国空軍はその後 10 年間、優勢を保つであろう、と述べた」とする記事である。

中国空軍指揮学院の専門家は次のように回答した。「SU-35 と第 5 世代戦闘機の差は、僅かではない。エンジンについて、SU-35 はエンジン故障のため原型機が 1 機破壊した。2011 年のモスクワ航空ショーでは T-50 のエンジンから火が出た。このことは 117 エンジンが未完成であることを示している」と。

これらの点から、本誌は、この専門家の評価に驚いた。空軍指揮学院と言えば、中国空軍の最高学府である。この専門家は、SU-35 が使用する 117S エンジンと T-50 FGFA が使用する 117 エンジンを混同している可能性がある。本誌が何度も紹介した通り、いずれのエンジンも AL-31F エンジンの改良型（SATUN を筆頭に）とはいえ、S の字が付くか付かないかで、材料から、推力、寿命まで完全に異なる。117 は、T-50 の最終的なエンジンではない。真の第 5 世代機用エンジンは、2016-2018 年に出現し、逐次 T-50 に搭載される。

しかしこの中国専門家の意見の一部は正しい。すなわち、たとえ T-50 が代用エンジンを使用していたとしても、依然として改良すべき点がある。航空工業大国ロシアの次世代戦闘機でさえ、心臓病（エンジンの不具合）を患っている。117S から 117 への進化を見ると、大推力航空エンジン開発の道筋を見ることが出来る。すなわち一步一步改良を重ねることであり、一足飛びの改善はできない。ロシア SALYUT 社が開発した AL-31F は、別の改良路線を選択した結果、

すなわち AL-31FM、M2 に進化させ、アフターバーナー推力を 1000KG 増加させた。

また同専門家は、SU-35 と第 5 世代機の大きな違いは、ステルス性能とアビオニクス性能であると述べている。ステルス性能の指標である戦闘機正面の RCS については、F-35 は 0.1 m²以下で、F-22 は 0.01 m²である。SU-35 は 0.5 乃至 2 m²である。パッシブ・フェーズドアレイ・レーダーは将来技術の発展方向ではないため、SU-35 のレーダーは、F-22 及び F-35 のアクティブ・フェーズドアレイ・レーダーと比較すると多少劣っている。

同専門家は、SU-35 のステルス性能と F-15SE 等のステルス版第 4 世代戦闘機を比較し、SU-35 は多種類のステルス処理を行っていると述べている。すなわち、エンジン吸気口に電波吸収材を塗布した結果、吸気口が生み出す反射波を半分に減らすことが出来たと述べている。複合材料の採用と露出したセンサーを減らす技術によって機体のレーダー反射面積を有効に減じることが出来る。F-15SE は、一部のレーダー波に対して強い反射特性を示すことから、機体の外形を改善した。例えば搭載武器を機体内部に取り込み、エンジン吸気口等を改善した。また F-15SE はステルス塗料を採用し、垂直尾翼を F-35 方式に変更した。ボーイング社によると、F-15SE の正面のステルス能力は米国の F-35 に匹敵するという。両者の元の機体外形、改善項目及び技術的処理を考慮すると、ステルス性能について、どちらが優勢であると断言することはできない。

もし中国が SU-35 を獲得したならば、外国メディアが報道したように本当に今後 10 年間、航空優勢が保持できるのだろうか？この疑問について、中国の専門家は：この疑問に答えるには、2 つの方面の要素について分析しなければならない。1 つは、SU-35 の戦闘機としての戦技能力であり、他の要素は、現在の中国空軍の装備技術水準である。両者の分析結果が答えになる。これは、定量的に分析して初めて結論が得られる。外国メディアの評価は正確ではない、と述べた。

残念ながら、全ての報道を見ても、”細部について定量的分析”を行った記事は見られない。全体的に見て、中国空軍指揮学院の専門家の意見は、一種の意見である。これは SU-35 の輸入に対して保留すべきとする意見であり、SU-35 は中国空軍に 10 年間の優勢はもたらさないとする。楊政衛氏の特集記事が実際に指摘するのは、SU-35 の周辺国への影響であり、SU-35 と F-22 の戦闘力について詳細に比較してはいない。

面白いことに **SU-35** に関し多少断言できることがある。それは、中露双方に” 猶予派” が存在することである。しかもこの猶予派の声は大きい。これが、現在 **SU-35** 導入に関する中露間の交渉が円滑に進まない理由である。**KDR** は、ロシアの軍備技術輸出入局副局長のニューデリーでの発言に注目した。彼は：中国人は、我々に対し、懸架システムの改良を要求した。我々は、この改良には限度があると考えている、と述べた。

中国側の要求は、当然、**SU-35** に国産の空対空、空対地武器を搭載したいためであろう。しかし懸架システムの変更は小さな変更ではない。**SUKHOI** 航空機会社での技術鑑定と分析が必要であり、懸架するミサイルの種類によっては、**SU-30MKI** のように機体強度の強化が必要になる。インドは、**BRAHMOS** 多用途ミサイルを搭載するために、**SU-30MKI** の懸架システムを自ら設計し、**SUKHOI** 社の責任で機体構造、懸架システムを改良した。

副局長の後ろ向きの談話は、ロシアが **SU-35** を中国製武器システムと整合させることを希望していないことを暗示している。もしそうならば、**SU-35** の対中輸出問題には、さらに多くの問題が出てくる。

以上